

山路楓を觀る

夏目漱石

石苔雨に沐滑らかにして攀難し

水渡り林を穿ち往又還る

処処の鹿声尋ね得ず

白雲紅葉千山に満つ

【作者】夏目漱石(一八六七〜一九一六年)(慶応三年〜大正五年)明治期の小説家。東京出身。名は金之助。東大英文科卒。松山中学教諭、五高

教授を経て、イギリスに留学、帰国後一高教授。『明暗』では、自我を越えた所謂「則天去私」の世界を志向した。

【語釈】*山路観楓:(雨後の)山道で、かえで(の紅葉)を観賞した。*石苔:石の上に生えたこけを言う。

*沐雨:雨で髪を洗うこと。ここでは苔を髪にたとえ、苔が雨にぬれているさまをいう。*難攀:よじのぼりにくい

*渡水:川を渡る。*穿林:林を通り抜ける意。*処処:ここかしこ。あちらこちら。方々。

*白雲:白い雲。俗世間を超越したことを暗示する語でもある。

【通釈】石の上に生えたこけを雨が洗い、(そのため)滑って登りにくく。川を渡り、林を通り抜けて、行つて、また帰ってきた。

方々で鹿の鳴き声があるが、(姿は)見付けられなくて。白い雲に紅葉が、山々に満ちている。いもみじが山々に満ちている。